

コロナ時代に水上勉を思う

COLUMN
県内
大学発
経世済民

605

埼玉学園大

2022年の今年、水上勉(1919~2004)が「くくなつて18年になる。61年に「雁の寺」で直木賞を受賞して以降、「飢餓海峡」「越前竹人形」(63)、「金閣炎上」(79)といった力作を次々に発表した彼は、文学の世界にとどまらず、映画、演劇といったジャンルにおいても活躍をみせた。

映画化、舞台化された作品も多く、また自身が出身地福井県おおい町に創設した若州一滴文庫は、彼の多方面の活躍を反映

して、文学館の枠にとどまらず、美術、演劇を含めた芸術文化の拠点として運営されている。竹人形の若州一滴座や劇場も併設し、かやぶきの古民家や美しい庭園と併せて、地域のコミュニティースペースとしての役割も有した独特の空間であり、筆者も訪問した際、既存の文学館の概念に収まらないその存在を目の当たりにし、圧倒された。文学の世界でも、芥川賞と直木賞両方の選考委員を歴任したことも象徴されるように

掛野 剛史 人間学部 教授

に、純文学と大衆文学の境を越えた活躍をみせ、まさに昭和文学史において独特の地歩を占めている作家である。

戦後の一時期、浦和に住んでいたこともある水上は、作家以前に多くの職業を転々とした。53年には繊維経済研究所に勤務。雑誌『繊維』など業界紙誌の編集に従事し、全国の繊維工場の見学記事を書いた他、堀留町や岩本町周辺に多数あった洋服メーカーの広告取りに回った。この研究所勤務時代に見聞した取り込み詐欺事件が「霧

い」が長持ちしないアセテートの心深く刻まれた。

影」という作品のヒントとなったことは知られていよう。その後、東京服飾新聞という業界紙を創刊し、「業務課長」という肩書きで紙面にも登場しているのは一興だ。新聞社がつぶれた後は、既製服を月賦販売する会社を興し、業界の伝手で全国各所を行商に歩いた。足利にあったアキレス(当時は興国化学工業)の工場に、アセテート生地の重い既製服を風呂敷に抱えて売りに行った思い出は水上の心に深く刻まれた。

アセテートは安いが長持ちせず色あせ、苦情が出た。問屋と粘り強く交渉し、純毛服を仕入れて売り、結果歓迎された。安いが長持ちしないアセテートの服より、仕入れは難しいが純毛服が後々まで感謝される。困難な課題にぶつかっても長持ちする純毛の作品を書きたい。この思いは小説を書く底力になったと水上は言う。

今年秋には水上の「土を喰う日々」わが精進十二ヵ月」を原案にした映画「土を喰う十二ヶ月」が沢田研二主演で公開される。そしていささか宣伝めくが、かくいっ筆者も先頃、水上の初期社会派短篇のうち、現在容易に読めない作品を集めた『無縁の花』『不知火海泊屋』(田畑書店)という作品集を刊行した。いずれも高度経済成長期の社会の裏側で生きる人々を見つめた好短篇だ。

かけの・たけし 1975年生まれ。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。博士(文学)。埼玉学園大学人間学部講師、准教授を経て、2020年より現職。専門は日本近現代文学。共編著書に『水上勉の時代』(田畑書店)、『菊池寛現代通俗小説事典』(八木書店)などがある。

原発問題や障害者福祉問題にも積極的に発言、行動するなど、社会に深く切り結ぶ文学者だった水上なら、このコロナの時代にどんな発言をし、どんな作品を書いたのだろう。かなわぬことながら夢想は尽きなく。